

暗夜行路

—— 映画文学人生論

原作：志賀直哉 (1921-37) 「改造」
監督：豊田四郎 (1959) 脚色：八住利雄
出演：時任謙作 池部良 山本富士子 撮影：安本淳
直子 山本富士子 音楽：芥川也寸志
お栄 淡島千景
要 仲代達矢

何処までもこの人に随いて行くのだ

『暗夜行路』は志賀直哉が十七年の歳月をかけて完成させた長編小説。私は高校生のとき、ラストの場面で感動した記憶がある。主人公の時任謙作が伯耆大山で病気になる、意識不明のところを妻の直子が見舞って、「助かるにしろ、助からないにしろ、兎に角、自分はこの人を離れず、何処までもこの人に随いて行くのだ」というような事をしきりに思いつづける場面だ。

昭和三十年の当時は家にテレビがなく、夜は読書でもするしかなかったからかもしれないが、それにしても高校生がこの長編小説をよく最後まで読み通すことができたものだ。

時任謙作には祖父と母との間に生まれた不義の子という出生の秘密があった。世の中にはいろいろな境遇の子がいるものだ。

フーテンの寅さんの場合は父親が芸者にはらませて、生まれた子で、妹のさくらとは腹ちがい。十六歳のとき、父親と大喧嘩して家出し、二十年間行方不明だった。

時任謙作は、父親には冷たく扱われても、家出はしない。母の死後、祖父に引き取られて育ち、祖父が死ぬと、祖父の妾のお栄に身のまわりの世話をしてもらった。

成人した謙作は、伯母の娘の愛子との結婚を望んだが、うまくいかない。身をいれて小説を書くために尾道へ行って、孤独感におそわれる。お栄



暗夜行路

映画文学人生論

に結婚を申し込もうとして兄に相談すると、反対された。出生の秘密のせいか、その都度、身内からの反対で破談になってしまふのだ。

偶然、京都で見そめた直子との縁談がまとまって、やっと結婚することができたが、直子は流産した上に、謙作の留守の間、訪ねてきた従兄におかされる。謙作は心の修行のため、鳥取の大山に行つて、病気になる。知らせを受けた直子がかけたところが暗夜行路のラストである。

『暗夜行路』は、豊田四郎監督によつて映画化され、謙作を池部良、直子を山本富士子、お栄を淡島千景が演じている。私はまだ観る機会に恵まれていない。

原作を読んで感動したという映画監督には小津安二郎がいる。「激しいものに甚だうたれた。これは何年にもないことだった。誠に感ず」（昭和十四年五月九日の日記）。

その小津は『暗夜行路』を映画にしようとはしなかった。「今のうちに撮らないと、あの中に出て来る列車がなくなっちゃいますよ」とカメラマンの厚田雅春がすすめると、「映画に出来るものか」「天に唾するようなものだ」と吐き捨てるように言った。

しかし、小津監督の映画『東京物語』には尾道や列車を撮ったシーンがある。

十七年暗夜行路の山眠る